

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04673

研究課題名（和文）協同的な学習の参加構造をつくる教師の専門性の解明

研究課題名（英文）The expertise of teachers in creating collaborative learning participation structures

研究代表者

金田 裕子（Kaneta, Yuko）

宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・准教授

研究者番号：30367726

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、協同的な学習活動の中でつくられている教師と子ども、子ども同士の関係を多面的・多層的に捉え、子どもたちが相互に関わりながら学ぶ関係を築いていく教師の役割を明らかにすることを目的とした。その結果、第一に、ペアやグループにおける子ども同士の関係を分析し、協同的な学習における参加構造の多元性、多層性をより詳細に明らかにした。第二に、教師が教室の参加構造を多面的で多層的な会話フロアによって構成される構造へと転換するプロセスを分析した。第三に、これらの参加構造の転換が示す方向性を民主的な公共圏の生成として捉え、多面的・多層的な会話フロアが親密圏と公共圏の特徴を持ち合わせていることを示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教室における子どもたちの参加を保障し対話を支援する教師の役割を協働的な学びをデザインする教師の専門性として位置づけた。具体的にはまず、子どもたちの協同的・対話的な学習を目指した授業において、参加構造の概念によって教師と子どもたち、子どもたち同士の間で生成する複雑な関係を見取る視点を提示した。次に、教師が学習活動の中で子どもたちに即興的かつ応答的に関わる役割を示したことで、参加構造を学び合う関係に再構成する際に有益な視点を提示した。最後に、この視点の導入により、子どもたちの対話から生み出される多様な個人的な話題を多層的に聞き、共有し、学びに位置づけていく教師の役割が重要であることも示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify the teacher's role in building learning relationships in which children interact with each other in collaborative learning activities. As a result, first, we analyzed children's relationships with each other in pairs and groups to reveal in more detail the pluralistic and multilayered patterns of the participation structure in collaborative learning. Second, we analyzed the process by which teachers transform the participation structures in their classrooms into structures composed by a pluralistic and multilayered conversational floor. Third, we viewed the directionality indicated by the transformation of these participation structures as the creation of a democratic public sphere and suggested that the pluralistic and multilayered conversation floor has the characteristics of both the intimate sphere and the public sphere.

研究分野：教育方法 カリキュラム研究

キーワード：協同的な学習 参加構造 会話フロア 公共圏

1. 研究開始当初の背景

平成 29 年改訂学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」の実現が目指される中、授業にペア・グループによる協同的な学習活動が授業の中に積極的に位置づけられるようになってきている。教師には、授業の中で子ども同士の協働と対話を支援し、深い学びにつなげる力量が一層求められることとなった。一方、先行してアクティブラーニングの実践が展開された大学教育においては、表面上学び手が活動的である反面、知識内容と活動の乖離や学び手の参加の格差が生じるなどの課題が指摘されていた(松下、2015)。

初等・中等教育においても、同様の課題が見られる。これらの課題が生じる背景として、教室における子どもたちは対等な立場ではなく、互いに序列付けを行う(鈴木翔『教室内カースト』2012)など、既にある力関係を作り上げていることが知られている。そこで、教師が授業で子どもたちが対話的に学び合う関係を創る役割の中でも、既につくられている教師と子ども、子ども同士の関係を学習活動の過程で再構築する役割を捉える理論的枠組みを構築し、その詳細を明らかにすることが重要となる。

2. 研究の目的

本研究では、以下の2点を目的とする。1)協同的な学習活動の分析を行い、授業の中でつくり出されている教師と子ども、子ども同士の関係を多元的・多層的に捉える。特にペアやグループ活動などの子ども同士の対話を中心にした参加の特徴を明らかにする。2)子どもたちが相互に関わりながら学ぶ関係を築いていく教師の役割を明らかにする。特に、教師が学習活動の最中に教師と子ども、子ども同士の多様な関係を捉え、教室全体での対話やグループといった多様な学習形態の中で、教師と子どもたちが学び合う関係に再構築していく役割を明らかにする。

以上二点を明らかにすることにより、教師が子どもたちの協同的・対話的な学習を目指した授業において生成する複雑な参加の様相を見取り、再構成する際に有益な視点を提供することができる。また、こうした教室の参加に関する再構成の解明が、知っている者(教師)と知らない者(子ども)、知識を生み出す者と伝達される者といった知識をめぐる関係の変容とどのように関係しているかを明らかにすることも期待できる。この視点の導入により、対話的・協同的な学習における学びの質について理解を深めることができる。

3. 研究の方法

本研究ではまず、教師と子ども、子ども同士の力関係を学習活動の中でつくり直す教師の役割を捉えるために、学習活動の過程で生み出される教室の人間関係に着目してきた教室の「参加構造(participation structure)」の研究(Erickson, 1977 ほか)を分析概念とした。特に、子どもたちの複雑な参加の様相を捉えるため、ある話題を媒介にして形成される話し手と聞き手のセットを単位とした「会話フロア」(Shultz, et al. 1982)の概念を発展させた。分析対象は、これまで長期的に観察・記録した小学校家庭科、中学校社会科の授業であり、グループ活動において子ども同士が形成する会話フロアのヴァリエーションとその位置づけを提示した。

次に、中学校数学、小学校算数の事例を分析対象に加え、一元的な会話フロアを多元的・多層的に転換していく教師の働きを解明した。特に教師が子どもたちの発言に応答する際の一形態であるリヴォイシングが参加構造の転換にどのように機能しているのかに注目した。

最後に、教室における「参加」の概念および、学びにおける民主的な関係の特徴に関して、さらなる理論的な枠組みの深化を行った。参加構造の転換には、子どもの力関係を捉え、学びの過程を通して民主的な関係に再構築するプロセスが伴っている。本研究において収集・分析した実践に加え、この側面に焦点化された教育実践の記録および公共圏に関する理論を参照した。

4. 研究成果

研究成果として、(1)会話フロアを子ども同士の関係の分析にも適用し、協同的な学習における参加構造の多元性、多層性をより詳細に明らかにした。(2)並行して、それらの複数の分析事例を関連付け、教師が教室の参加構造を多元的で多層的な会話フロアによって構成される構造へと転換するプロセスを分析した。(3)最後に、これらの参加構造の転換が示す方向性を民主的な公共圏の生成として捉え、多元的・多層的な会話フロアが親密圏と公共圏の特徴を持ち合わせていることを示唆した。以下、三点について詳述する。

(1) 協同的な学習形態における子ども同士の関係

会話フロアは、特に聞き手の関わりを複数のタイプで捉えることにより、話し手と聞き手の参加の様式を多様に捉えることを可能とした。しかし一斉授業に見られるような一元的な会話フロアにおいては、教師が主要な話し手であるだけでなく、生徒の発言の順番配置の権限をもつ。そのため一元的な会話フロアにおいても、実際には生徒たちの順番取りの行為が展開されているが、生徒同士の関係は潜在的であった。一方、協同的な学習形態において、生徒同士がペアまたはグループで学習活動を行う場合、子どもたちは直接互いに話し手または聞き手として会話フロアを形成しあうことになる。会話フロアのタイプを子どもたちの活動の分析に援用す

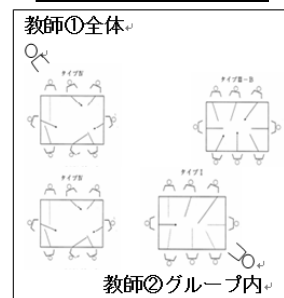
ることにより、各グループのメンバーによる会話フロアのタイプは多様であり、必ずしも対等な関係を形成しているわけではないことが捉えられた。このことは、ペアやグループなどの子ども同士の学習の場を設定することが、単なる学習形態の変更にとどまらず、子どもたちが日常的に築いている様々な力関係が授業において表出する場となっていることを示している。

また、会話フロアのタイプを援用してグループ活動内の子ども同士のやり取りの微細な変化を捉えると、子ども同士の関係は常に固定的ではなく、グループのメンバー構成や教科、学習課題、活動のデザイン、教師の支援によっても変容することが見てとれた。本研究では特に教師の支援に焦点を当てて考察したが、教科や学習課題による違いについて、今後さらに検討が必要である。

(2) 教師による多面的・多層的な会話フロアの形成

子どもたちによる多面的な会話フロアが対話的に形成される基盤には、教師が起点となる二つの転換が生み出されていた。第一に、教師が主要な会話フロアでの位置取り【図1：】を「主要な話し手」から「主要な聞き手」へと転換することが起点となっていた。教師が「聞き手」となることは、教師が率先して子どもたちの発言やつぶやきに耳を傾け、一人一人の「自分らしさ」を保障するリヴォイシングを行うことにより遂行されていた。さらに「沈黙」も参加の一形態としてとらえた Shultz (2003, 2009) が示した「聴くこと」の4つの次元を参照し、国語の実践記録、算数の観察記録を分析した。「聴くこと」の4つの次元とは、「特定の生徒を知るために聴く」、「教室のリズムとバランスを聴く」、「生徒の生の社会的・文化的な文脈、コミュニティの文脈を聴く」、そして最後に「沈黙と沈黙させる行為に耳を傾ける」である。教師は教室で「話されていないこと」や不在を積極的に探究することで、教室内で働いている力関係に気づき、沈黙させられている声を引き出すことが重要になる。

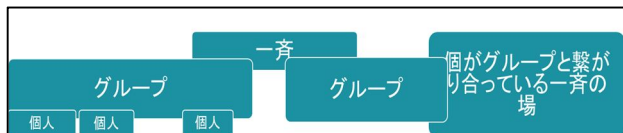
図1：教師の立ち位置



第二に、多面的な会話フロアにおいても、会話フロア内の「聞き手」および子ども同士の「媒介者」の位置に立っていた【図1】。教師がこのような立ち位置で子ども同士の会話フロアの成立を支援することにより、子ども同士の力関係が再編され、小さな会話フロアが安心できる、民主的な関係へと編みなおされている。それにより、教師を主要な話し手とする一元的な会話フロアの優先性が解体し、子どもたちによる多面的な会話フロアを基盤とした参加構造の組織が可能となっていた。

このような転換を通じて再構成された教室全体の参加者による会話フロアは、常に子ども同士の多面的な会話フロアを潜在的・顕在的に伴っていた。例えばある授業では、図2のように、授業の始めにグループ内のメンバーで必要な時に自由な会話フロアが形成される活動があり、その活動で生み出された話題が全体のフロアで取り上げられた。しかし完全に全体の大きな会話フロアに切り替わるのではなく、大きな会話フロアとグループメンバーによる小さな会話フロアが頻繁に往還する多層的な構造を生み出していた。

図2：授業における会話フロアの多層性(例)



(3) 公共圏としての会話フロア

上記で分析した事例において、図2に示したように、子どもたちによる対話的な会話フロアが多面的に形成されている場合でも、教室全体で大きな会話フロアが形成される機会が消失するわけではなかった。しかし会話フロアの機能は、一斉授業における一元的な会話フロアとも、ペアやグループの形態による小さな会話フロアを伴って序列の最上位に位置し続けている大きな会話フロアとも、異なっている。第一に、大きな会話フロアにおいて教師が「主要な聞き手」として一人一人の子どもの「自分らしさ」を聴くりヴォイシングを行うことで、他の聞き手である子どもたちにも一人一人の「自分らしさ」が聞かれ、共有される場となる。

第二に、ある小さな会話フロアにおける話題が教室全体の会話フロアにおいて取り上げられることにより、他の会話フロアの子どもたちに聴かれ、共通の話題が再構成される場となっている。分析事例および実践記録の分析によると、ペアやグループでの活動では、メンバーの「自分らしさ」が生かされた視点や語り口によって鑑賞や探究の対話が展開していくため、ある程度多様性の幅をもった話題で会話フロアを形成している。それらは各グループのオリジナルのプロセスでありながら、他のグループの子どもたちの鑑賞や探究においても重要な話題を含んでいる。そのような話題を教師や子どもたちが大きな会話フロアに話題として提示することにより、自分たちの探究のプロセスが教室の他の仲間にも共有される、あるいは他の仲間の探究のプロセスが自分たちの探究とも重なる、といった場となりうる。

このような会話フロアの形成は、人々の<間>にある共通の問題への関心によって成立する公共圏(齋藤、2000)の特徴を有している。教師が一人一人の子どもの「聴く」ことで、子どもたちの人間らしさに気づき、創造する人、行為する人としての能力に気づくことにつながり、教室のすべての子どもたちが鑑賞や探究に参加する、より民主的な会話フロアを形成している。他方で、教室の公共圏の生成には、一人一人の声および声にならない声(沈黙)が聴かれることが

基盤となって、子どもたちの参加が生み出されていることが見て取れる。この会話フロアは公共圏の特徴を有していると同時に、具体的な他者の生や生命への配慮・関心によって形成・維持される親密圏（齋藤、2000）の特徴も有しているのではない。また、新たに創出される公共圏のほとんどは親密圏が転化する形で生まれると指摘されている（齋藤、2000）。今後は、親密圏を基盤として生成する教室の公共圏で子ども同士がつくり合う知の性質について、さらに探究する予定である。

（４）本研究の意義

以上三点を明らかにすることにより、教室における子どもたちの参加を保障し対話を支援する教師の役割を協働的な学びをデザインする教師の専門性として位置づけることができる。

具体的にはまず、子どもたちの協動的・対話的な学習を目指した授業において、教師と子どもたち、子どもたち同士の間で生成する複雑な関係を見取することに寄与すると考える。次に、このような学びの社会的な次元への着目は、教師が学習活動の中で子どもたちに即興的かつ応答的に関わることで、学び合う関係に再構成する際に有益な視点を提供できると考える。最後に、この視点の導入により、子どもたちの対話から生み出される多様な個性な話題を多層的に聞き、共有し、学びに位置づけていく教師の役割が重要であることも示唆された。教室の参加の再構成は、教師のリヴォイシングの特徴に表れていたように、教室で正統に聞かれる話題の幅と性質を転換するものである。つまり、知っている者（教師）と知らない者（子ども）、知識を生み出す者と伝達される者といった知識をめぐる関係の変容を意味している。今後、学び手と共に創造するカリキュラムの構造解明や、カリキュラムを子どもと共に創る教師の専門性の検討へと展開することが可能である。

【引用文献】

Erickson, Frederick, and Shultz, Jefferey (1977) " When is a Context? : Some Issues and Methods in the Analysis of Social Competence, " In *Ethnography and language in educational settings*, edited by J.Green, and C. Wallat.

松下佳代（2015）『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房

齋藤純一（2000）『公共性』岩波書店

Shultz, J., Florio, S. and Erickson, F. (1982) " Where ' s the floor ? :Aspects of the cultural organization of social relationship in communication at home and in school, " In *Children In and out of School: Ethnography and education*, edited by P. Gilmore and A. Glatthorn, Washington: Center for Applied Linguistics

Shultz , K (2003) Listening : A Flamework for teaching across differences , Teachers college.

Shultz , K (2009) Rethinking Classroom Participation : Listening to Silent Voice , Teachers college.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 金田裕子	4. 巻 第57巻
2. 論文標題 教室における聴くことを基盤とした参加構造の形成	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 pp.27-39.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金田裕子	4. 巻 Vol.3
2. 論文標題 教師の専門性を高める記録と省察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮城教育大学教員キャリア研究機構研究紀要	6. 最初と最後の頁 pp.1-22.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金田裕子	4. 巻 第56巻
2. 論文標題 教室の多層的な会話フロアにおける公共圏の創出の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 pp.263-274.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金田裕子	4. 巻 第3号
2. 論文標題 教室における「参加」を問い直す	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城教育大学教職大学院紀要	6. 最初と最後の頁 pp.33-42.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金田裕子	4. 巻 Vol.2
2. 論文標題 子どもの声とともに創るカリキュラム・マネジメント-小学校家庭科におけるカリキュラム・デザインの検討-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宮城教育大学教員キャリア研究機構研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 金田裕子
2. 発表標題 教室における公共圏としての会話フロアと教師の位置取り
3. 学会等名 日本教育学会第81回大会自由研究発表
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金田裕子
2. 発表標題 協同的な学習の会話フロアにおける公共圏の生成
3. 学会等名 日本教育学会第79回大会自由研究発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金田裕子
2. 発表標題 協同的な学習における会話フロア間の関係の検討
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Kaneta
2. 発表標題 Using the concept of participation structure to improve teachers' professional development
3. 学会等名 The World association of Lesson Studies International conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 能智 正博、香川 秀太、川島 大輔、サトウ タツヤ、柴山 真琴、鈴木 聡志、藤江 康彦、金田裕子、他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 432
3. 書名 金田裕子「会話フロア」『質的心理学辞典』p.43	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------